

143号 目 次

- 1 P 手記「独房の世話係」 元サマナ、男性
2 P～ 手記「パウルのセクシャルヨーガ」 元サマナ、男性
6 P～ 手記「オウム修行の先達たち」 元サマナ、男性
7 P 資料「上祐の 2007.3.8 記者会見」抄本 その1
8 P 手記「オウム真理教の利他心は本物か？」 元サマナ、男性
9 P～ 手記「宮城刑務所だより」 元サマナ、男性、受刑者
11 P 資料「上祐の 2007.3.8 記者会見」抄本 その2
12 P 窓口「わかりにくいときは原点に戻る」

独 房 の 世 話 係

富士の道場が出来たばかりの頃、富士道場の近くの土地にコンテナがおいてあって、その中を仕切って小さな部屋を何部屋か作り、そこで独房修行をしていました。各部屋には外側からカギがかけられ、中にいる人が自分で出れないようになっていました。

私は独房の世話係をしていたことがあります。世話係は、一日 1 回食事を運んだり、簡易トイレの汚物を捨てたりなどの仕事をします。ある日、夜遅く、食事を運びに行ったとき、独房に入っているある女性の部屋の入り口を空けたら、勝手に出てきてしまい、コンテナの外まで出てしまいました。それで私に抱きつきました。その女性が言うには、他の部屋の人で、魔境っぽい人がいて、幽霊が見えるなどと言っていたり、ドアを蹴破ろうとドンドン叩いていて怖いそうなんです。

「もう独房を出たい」と言っていたのですが、私の判断で勝手に出すわけにもいかず、富士の綺麗な夜空の下、抱きつかれながら、一生懸命説得しました。

しばらくして理解してくれたのか独房に戻ってくれました。結局その人は独房修行を終えた後、1、2ヶ月後には家に帰ってしまいました。彼女はどのようにしているのでしょうか。

今となってはなつかしい思い出です。

男性 元サマナ

バウルのセクシャルヨーガ

『国立民俗学博物館研究報告』1995—20 巻4号に載っていた村瀬智氏の論文〔「つぎはぎジャケット」と「ふんどし」〕を読みました。セクシャルヨーガについて書かれたもので、興味深い内容だったので、紹介したいと思います。

村瀬氏の解説するセクシャルヨーガはバウルというインドの宗教グループの性的エネルギーの制御のテクニックについて解説したものです。まずバウルとはどのような集団なのか説明します。

バウルとは

バウル

インド東部のベンガル地方（現在のバングラデシュを含む）の大道芸人およびその音楽。彼らはヒンドゥー教と仏教、イスラームの影響を受けてできた独自の宗教をもち、その思想を歌と踊りで表現する。バウルたちは自らの肉体を小宇宙と見なし、体内に神が宿り、男女の性的結合を通して神と合一することができると信じている。偶像崇拜、寺院礼拝はいっさい行わず、その自由奔放で神秘主義的な思想は、常識を超えたり、社会通念からはずれることもあり、人々からは常軌を逸した集団と見なされたりすることも多い。比喻や謎かけを織り込んだ歌の内容は一見難解であるが、人生の悲哀や男女の愛、生と死などについて探求した独自の哲学があり、人の心をとらえるものがある。ベンガルの詩聖タゴールによってバウルの詩的表現法や音楽的価値が再評価され、その名は世界的に知られるようになった。歌い手はコールなどの太鼓を伴奏に従えて、1弦のエクタラや2弦のコモックなどの撥弦楽器を自ら弾きながら歌い、踊り歩く。（『南アジアを知る事典』平凡社 p540）

バウルの宗教には、タントラの思想やヨーガ行法、それにイスラーム神秘主義など、いくつもの宗教的伝統が入っている。バウルは「サドゥナ」と呼ばれる宗教儀礼を実践する。「サドゥナ」にはヨーガの実践を通じて行われる性交儀礼を含んでいる。

バウルのセクシャルヨーガは、性的エネルギーの制御、精液の保全を重要視する。それは「ブラーマチャルヤ」と呼ばれる。

「カーマ」と「プレーマ」

ベンガルのヴィシュヌ派は、「カーマ」と「プレーマ」を区別している。どちらも愛に関することだが、「カーマ」は自分を満足させたい欲望のことで、

「プレーマ」はクリシュナを満足させたい欲望のことで、両者には違いがある。バウルもこの区別を取り入れている。バウルは「カーマ」を否定しているのではなく、「プレーマ」にいたる前段階と位置づけている。ミルクからバターを作るように、「カーマ」から「プレーマ」を作り出す。人は性欲に支配され、「カーマ」で終りだと考えるのは危険なことと認識されている。真理は「カーマ」を「プレーマ」に変えることだと考えられている。

バウルの「性的エネルギーの制御のテクニック」について村瀬氏の論文の中からその部分を引用して紹介します。

バウルは「精液は保全されねばならない。なぜなら、精液のむだづかいは、精神的なパワーの損失につながる」と主張する。彼らはさらに、「射精はこの世の苦しみの源であり、それは人の死と同じ意味をもつ」と信じている。なぜなら、それは、「子孫をつくること」をもたらし、彼を「生と死と再生の鎖」へと導くからだ。このことは、バウルにとっては、人を現象世界と「輪廻」に束縛することを意味する。伝統的なヒンドゥー教では、「モクシャ」（解脱）の究極的な目的は、この滅亡を免れえない日常経験の雑念たる俗世界から脱して自由になることであり、「輪廻」から解放されることである。もちろんバウルは、ヒンドゥー教の聖者がしばしば好む、抽象的な哲学概念の議論には深入りしない。しかし、バウルは、射精をしないことによって「モクシャ」への道を察知し、そのことが、バウルの道のゴールに到達する「かぎ」だ、と信じているようである。（『国立民族学博物館研究報告 1995-20 巻 4 号』〔「つぎはぎジャケット」と「ふんどし」〕村瀬智 p 735）

バウルはさらに、男性は、本質的にパワーの損失を被りやすい、と考えているようである。彼らによれば、精液はつねに、小便や汗などの分泌物として体外ににじみでていとされる。その反対に、子を産める年齢にある女性は、無尽蔵のパワー（シャクティ）の持ち主だとされる。本質的にパワーの損失を被りやすい「男性」は、無尽蔵のパワーの持ち主である「女性」から、パワーの補充を受けねばならない。そのためには、「性交儀礼」が必要である。しかし、性交儀礼で男性が射精をしてしまったら、本来の目的がそこなわれてしまう。そこで、「性的エネルギーの制御」や「精液の保留」を意味する、「ブラーマチャルヤ」の訓練が必要となる。つまり、ヨーガの座法や呼吸法によって、「射精をともなわない性交儀礼」（「サドゥナ」）を首尾よく実行するために、みずからを鍛えなければならないのである。多くの男性バウルは、「わたしにはシャクティが必要です。しかし、ブラーマチャルヤなくして、シャクティをくみ上げることはできない」と証言した。また、あるバウルは、「もしひとりの男性が、彼の精液を無傷の平穏な状態で体内に保有するならば、彼はすべての標準の男より、抵抗力や持続力において、精神的に

も肉体的にも勝るであろう。彼のパワーは増大する。彼のペニスは、ライオンのごときものとなる」と述べた。しかし、この「サドゥナ」を実践するのは、たいへん難しいものとされている。だから、バウルは、弟子を導くグルの重要性、とくにトレーナーの役割を果たす「シッカ・グル」の重要性を力説するのである。

わたしは、フィールド・ワーク中に、「バウルというのは男であり、また同時に女である」ということを、しばしば聞かされた。このなぞめいた定義は、彼らのブラーマチャルヤの訓練の別の側面を示している。つまり、もし男が女になったら、おそらく彼は、女性の肉体を欲しいものとは思わなくなるだろう、ということである。

さきに述べたように、バウルという語は、「神に恋をして狂気となった男の、ある種の心理状態」を暗示している。バウルの神に対する理想的な宗教的態度は、牛飼女ゴピーのクリシュナに対するそれのようなものと考えられている。この宗教的態度を、ベンガルのヴィシュヌ派は、「ゴピー・バーヴァ」と呼んでいる。バウルはこれを、文字どおりに解釈しているようである。バウルは、クリシュナにみずからをささげるために、家庭や家族、体面や体裁、それに社会的地位など、すべてを捨ててしまったゴピーを見習っているのだ。バウルも世俗の世界を捨ててしまった。彼は、今や、ゴピーだ。ゴピーにとって、クリシュナがこの宇宙で唯一の男性だった、という意味で、彼は神に対して女性なのだ。彼は、彼自身のことを、そう思わなければならないのである。「ゴピー・バーヴァ」は、性関係において、彼の男性原理を無効にする。バウルが神に対して女性になったとき、彼は浄化される。そして、「カーマ」なしに「性交儀礼」に入ることができる。「カーマ」はもはや存在しない。バウルは、彼自身を満足させるために女性を望むことはできない。なぜなら、彼はもはや男性ではないからだ。つまり、「カーマ」から「プレーマ」への変化は、「男性」から「女性」への変化なのである。（『国立民族学博物館研究報告 1995-20 巻 4 号』〔「つぎはぎジャケット」と「ふんどし」〕村瀬智 p 737）

まとめ

男性が射精しないために、女性に対する性的興奮を遮断するテクニックとして、男性が女性の意識状態になるようにするのはなるほどと思えるのだが、しかし、そのような状態で男性側が性的儀礼を行うのが可能かどうか疑問が残る。

知り合いのインド研究者に聞いたのですが、宗教には本音と建前というのがあって、実際のバウルは、この論文では射精のコントロールとか言っているけど、多くのバウルは奥さんがいて、たくさん子供を作っているそうです。それを聞いてがっかりしてしまいました。

まあ、たしかにオウムでも、在家信徒は純粹だから、出家信者は厳しい禁欲の生活をしていると思っている人も多かったのではないかと思うのですが、実際の出家信者の実態は、まじめな人もいましたけど、みだれている人もいましたね。幹部クラスの人の中にもね。

オウムも麻原さんの説法や教義で言っている性的禁欲と実際の出家信者とではギャップがありましたね。理想、目標としてこうなだけで、なかなか守れないというのが現実なんですか。バウルの場合もそうなのかもしれませんね。

でも、バウルの男性が女性の意識状態になって、異性に対する性的欲求を克服するという考え方は面白いですね。ニューハーフは、それを実践していることになるのでしょうか。でも同性に走ってしまったらどうするのですかね(笑)。

村瀬論文によるとバウルのセクシャルヨーガでは、射精は禁物のようですが、麻原氏も同じようなこと言ってましたね。ラジニーシ(Osho)のタントラの弟子 ラダ氏に「タントラは接して漏らさずにしないとダメなんですか?」と聞いたことがあるのですが、彼女は「それじゃ我慢大会になってしまう」と言っていました。タントラと言っても、いろんな考え方があるようですね。ラダ氏の指導するタントラは射精してもいいようです。

私はまだ聞いたことはないのですが、バウルの音楽はとても美しいらしいです。バウル音楽のCDでもあったら聞いてみようと思っています。

村瀬氏の論文は面白いので興味のある方は読んでみてください。普通の本屋に売っているような本ではないので、手に入れにくいですけどね。

参考文献

『国立民俗学博物館研究報告』1995—20 巻4号〔「つぎはぎジャケット」と「ふんどし」〕村瀬智

『南アジアを知る事典』平凡社

『ヒンドゥー教』クシティ・モーハン・セーン著、中川正生訳講談社現代新書

元サマナ

オウムの修行の先達たち

私の知っている元信者の女性で Y 子さんという方がいました。彼女は初期の頃、夫婦で出家したのですが、途中で二人とも帰ってしまいました。そのことについて麻原氏は説法で次のように話していました。

「例えばこれはあの、バーラ大師が在家に帰ったわけだけど、それなんかは典型的な例だけだね。奥さんの Y 子さんが、ね、バーラ大師を徹底的に男性として意識したわけだよ。そうすると、上昇のエネルギーと、下降させるエネルギーとがぶつかり合って、下降させるエネルギーが強いと。どうなるこれは。——二人とも一緒に落ちてしまうと、いうことになるよね。」

そして麻原氏は、「そのような形で相手を真理から引きづりおろしたら、その人のその後の人生というものは悲惨の一途をたどるだろう」と言っていました。今、Y 子さんがどんな生活をしているのかは知りませんが、麻原氏の言う通りになったのか気になります。

最近、上祐氏のブログにこんなことが書いてありました。

過去の事件は、最速の解脱への道であるヴァジラヤーナの実践として行われましたが、実際には、外部に多くの被害者を出し、今でもその後遺症に苦しんでいる人を出しただけでなく、高弟たちを初めとして信者たちは、解脱するどころか、多くの人が、悲惨な状態になっています。

元代表の女性の高弟であった女性(人権上実名はあえて伏せます)は、事件で勾留されて、精神的に変調をきたし、現在の状況については情報を持っていませんが、少なくとも、出所後は、精神病院に、入院・通院する結果となりました。

前後不覚となって、東京世田谷の施設に来たときもあります。

元代表の長女(人権上実名はあえて伏せます)は、2000年の旭村事件の後で、精神的な変調をきたし、精神病院に入院し、今は他の家族と別居しています。

元代表に一番先に巡り会った女性の元高弟は、勾留中に、重度の脳疾患で倒れ、言語・記憶に重大な障害を残しました。また、元代表の古参の弟子である元キサーゴータミー正悟師は、先日癌で亡くなったと聞いています。

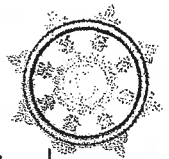
高弟のほとんどは脱会しました。そして、上記の有名な高弟以外にも、精神的な変調をきたした人がいます。

これを読むとオウムで長く深くかかわってきた人の方が悲惨な状態になっているような気がします。麻原氏にいたっては糞尿垂れ流しでオムツをして、誰もいないのに、誰かと話しているかのように相槌をうったり、うなったりするだけ。接見に来た娘の前でマスターベーションをするなど廃人のような状態です。

麻原氏は正しい宗教の条件として、先達がいることだと話していました。その宗教を実践して、結果を出している先達がいることが正しい宗教の条件だと。上祐氏の文章に出てくる、初期の頃から麻原氏について修行してきた先輩の人たちは、オウム信者の将来の姿を示しているのかもしれませんがね。現役の人たちは、自分たちの先達がどのような状態になっているのか、現実をしっかりと知るべきだと思います。自分たちの延長線上にある人たちなのですから。今となっては、Y子さんのようにやめていった人が悲惨なのか、高弟たちの方が悲惨なのか、考えさせられます。

元サマナ

上祐の2007. 3.8 記者会見の抄本—その1 アンダーラインに注意



あくまで予定。◎代表役員：上祐史浩◎副代表役員：水野愛子、細川美香、広末晃敏他
位階制度—アーレフでの位階制度は廃止し、役職員制度に移行し、役職をもって、組織内の指揮命令関係を位置づけ。宗教上・修行上の位階については、今後の新規導入も検討されていますが、アーレフにおける位階は踏襲せず、新団体の教義に基づく独自の基準で新たに。

麻原氏の位置づけ—オウム・アーレフ元代表の麻原氏には、何らの位置づけも与えません。新団体は、一連のオウム事件に関して、麻原氏の真摯な反省を最後まで求め。

ホーリーネーム—アーレフでのホーリーネームは、当然に全面的に廃止。新団体における独自の宗教名は、今のところ予定していません。組織構成・部署概要—出家制度は維持。

祭壇—アーレフでのシヴァ大神・ヴィシュヌ大神像等は廃止して、「釈迦三尊像」を採用（現在・過去・未来の三世の仏陀を現す）。弟子に対して「私を拝まず、自分自身と法（仏法）を帰依の拠り所とせよ」と説き、自らを含めた特定の人間を神とすることを否定した釈迦牟尼の思想を重視。

教義—オウム真理教においては、①麻原氏という特定個人を神の化身とした個人崇拜や、②世界を聖なる教団と悪の外部社会の戦いと位置づける善悪二元論の教義を盲信したことが、一連のオウム事件を惹起。このような教義・思想を完全に破棄し、仏教・ヨーガ・神道・自然宗教などに基づいて、①全ての人々や存在の中に神の現れを見て、自己の教師・反面教師として学びの対象として尊重し、②教団と社会を含めて、全ての存在は繋がっているという一元論的な教義を実践。また、善悪二元論に限らず、努めて盲信的な教義を排除し、できるだけ科学的・合理的な教義を形成し、宗教と科学が融合した思想を目指す。自らの経験・反省に基づき、現代世界に頻発する宗教紛争・宗教テロの防止・解決に貢献し、社会への償いを果たしていきます。

オウムの利他心は本物か？

今、ある先生が指導しているヨガ講習会に参加しています。その先生の話の中でマザーテレサの話がよく出てきます。インドのスラム街で倒れている汚らしい老人を嫌がることなく手を差し伸べて助けていったと。

この話を聞いたとき、オウムの信者の意識はどうだろうかと思いました。

すこし前、私が大学病院の近くのレストランで食事をしていたときなのですが、近くのテーブルに老夫婦が食事をしていて、夫の方は入院中なのか、点滴のようなものをしていました。

突然、婦人の方が、「だれかー！」と叫び、見ると夫の方が意識がなくなり、倒れそうになっていました。すぐまわりの客が、かけつけて、夫の体を支え、床に寝かしているようでした。その後、病院スタッフが来て、運ばれていきました。

私はそのとき、近くにいましたが、かけつけませんでした。その人の体に触れなくなかったからです。初期の頃、麻原氏は「病人は猫よりバイブレーションが悪い」と言っていたことがあったと思います。そういうのも頭にあったし。

オウムの信者の意識として、凡夫、在家信徒、自分よりステージの低いサマナに対して、見下し、汚らわしいものとして見る傾向があったと思います。オウムの信者がインドのスラム街で、倒れている汚らしい老人を見たら、おそらく触れると邪気が移ると言って、嫌がるでしょうね。知らん顔して通りすぎると思います。

マザーテレサとオウム信者での行動の違いを比べてみると なんていうか、オウム信者には傲慢と嫌悪のカルマがあるように感じます。アーチャーリーなんてその典型のように思います。四無量心とか利他心とか言っていましたが、このようなところに、なにかズレていた部分があったのではないかなと感じました。

元サマナ

宮刑日記

2009.2.5 着

寒、寒、官城刑務所だが、今日は少し暖かいので久しぶりのペンを持った。

オウムでは、放棄すること、捨てることか大切であると説かれていた。しかし、これは言うは易し、行うは難しである。

私はオウムや麻原を信じようとし、そして信じてきた。麻原から言われたことは、例えば自分の心に反することであっても実行してきた。例えば、例えは、伴の細胞100が、麻原を信じるという状態だった。しかし、麻原の悪行が露見し、今まで疑問に思っていたことが、急に表面化した。そして、最終的には麻原と決別することを決断した。

最初は特に変化がなかったが、1ヶ月、2ヶ月、3ヶ月と月日がたつにつれ、精神が不安定になっていった。おまけに、心の支えとしてデブットン教の本を読んだのが、いけなかった。その本は「タントラへの道」(コントロールパ、メルクマール出版)で、「この世は幻影である」と書いてあった。

言葉では、「この世は幻影である」ということは知っていたし、オウムでも言われていたことだ。しかし、不安定な心だった私は、辛い現実(正義の為の殺人ではなく、単なる殺人であること、その為に刑務所に行くが付け代はたらかないこと)から逃避したかったのだと思う。その為、この言葉を信じてしまった。

すると、本当は、この世が幻影の類々となってしまう。この感覚をどう表現したらいいかわからないが、夢の迷路に迷い込み、永遠にそこから出れなくなった(目を覚ますことができなくなった)。一起きているのに

開いて真我に目覚めさせる活動をされている。今までの成功を全て捨てることに周囲は反対し始めたそうだが、それを信じていけば現在の充実した生活はなかったと佐藤先生は断言されている。

オウムで学んだことで自分に利益になることならば、それは続けたい方がいいと思う。しかし、それ以外のものは全て捨て去らねばいけない。もうオウムは死んでしまったのである。そして、新しいものに挑戦したらいいと思う。

「捨てることは新しいものを得ることであり、捨てることは、新しいものを流入し続けることになる」。この佐藤先生から教えてもらった言葉を記して終りたい。

上祐の2007. 3.8 記者会見の抄本—その2 アンダーラインに注意



教材—新団体では、旧教材による教化活動を一切禁止。独自に制作した教材と、一般に出版されている図書の二つに。(中略)

アーレフからの食料(いわゆる「お供物」)購入は廃止。新団体独自の食事メニューを考案。アーレフの制服は廃止し新団体独自の制服。

観察処分への任意協力を約束—麻原氏の影響力を払拭する新団体は、理論上・法律上は、観察処分の対象になるとは考えられませんが、①新団体の理念であるオウム事件の贖罪のためには、住民不安の除去を最優先すべきであること、②新団体として完全に変わりきるためには、客観的な第三者の視点・評価を尊重すべきであると考え、当面は、観察処分に(任意に)協力することを公安調査庁幹部に約束しました。

新団体としましては、次回更新時期等の機会において、それまでに新団体が進める麻原氏の影響力の払拭などに関する努力・実績を公安調査庁が適切に判断されることを要請します。

分りにくい状況のときは原点に戻る

まあ分りにくい状況ですよ、上祐がサマナ 60 人ほどで「脱会」したとし、別の団板をつくる、という。そして批判に応じてか、帰依マントラや、立位礼拝、オウム三唱などもしないという。以前のホーリーネーム、階層性も使わないという（あいまいな所が少なく泣く抜け道が用意されているけど）

一方で、旧団体の代表は、正悟師会議で野田成人とした、野田いわく会計や人事も握れず、師からは抗議をうけた、と。野田は、その合同会議そしてその幹事役員会が実権を持っていると主張し、実際そんな感じ。さらにはアーチャー批判までブログ上し始めた。。説法する「正悟師」は二宮だけ。

このような時は、原点に戻るべき。つまり麻原さんの教え。マハームドラーであり、ヴァジラヤーナ。もし、今の状況も麻原さんの掌の上のことと考え、大切なのは麻原さんの教えを残すことという観点に立てば、「観察処分」外しをなんとか実現しないと。賠償も実に少しずつ社会の承認をと。

そのためには、「麻原さん外し」を外見からは徹底し、麻原家と結びついている人を外さなければならない。もともと「松本智津夫」は「麻原彰晃」の霊というか魂が入った自動車のボディに過ぎないという論法もあったね。

だから平気で嘘もつかなければならない、と。「嘘をつくにはまず味方から」です。そもそも上祐へのマハームドラーは「嘘をつくこと」でしたから。後になって「グルはやはり麻原さん」と言えばあつという間に戻る。

まあ、上祐さんやそのメンバーが、自己矛盾をどうするか、見所だと考えています。「できるだけ科学的・合理的な教義を形成し、宗教と科学が融合した思想を目指」が宗教の本質に反し、「自らの経験・反省に基づき、現代世界に頻発する宗教紛争・宗教テロの防止・解決に貢献し、社会への償いを果たしていきます」なぞと言える立場でなく、被害者や社会がどうしてほしいといっているか聞かないことが、どれほど傲慢なことか知らない又は無視している。

それでも、分裂していくことは良い傾向。もうその時期でしょう。「一人オウム」も増えるだろうけれど、それでも自分の頭で考え始めるしかないのだから。どんなにこれまでの人生をオウムに尽くしたのだとしても、生きていればこそ、泣くこともでき、また別の人生・考えを歩めるのだから。

もともと「犀の角のようにただ一人歩む」はずだった。

かなりや

西條八十

唄を忘れた金糸雀は、
後の山に棄てましょか
いえ、いえ、それはなりませぬ
唄を忘れた金糸雀は、
背戸の小藪に埋けましょか
いえ、いえ、それはなりませぬ
唄を忘れた金糸雀は、
柳の鞭でぶちましょか
いえ、いえ、それはかわいそう
唄を忘れた金糸雀は、
象牙の船に、銀の權
月夜の海に浮べれば
忘れた唄をおもいだす

『赤い鳥』(天正七年二月五日)
岩波文庫『日本童謡集』より

◎ カナリヤは歌を思い
出す手助けをする。

◎ カナリヤは自分で自
分の歌(考え)を歌う。

◎ カナリヤは歌を歌え
なくなつた鳥を捨てる
のではなく、温かく見
守る。

(地球の揺りかごで)